

データウォール用リアプロジェクタ “ PH70シリーズ ”

渋江重教*

“ PH70Series ”: Data Wall Rear Projector

Shigenori Shibue

要 旨

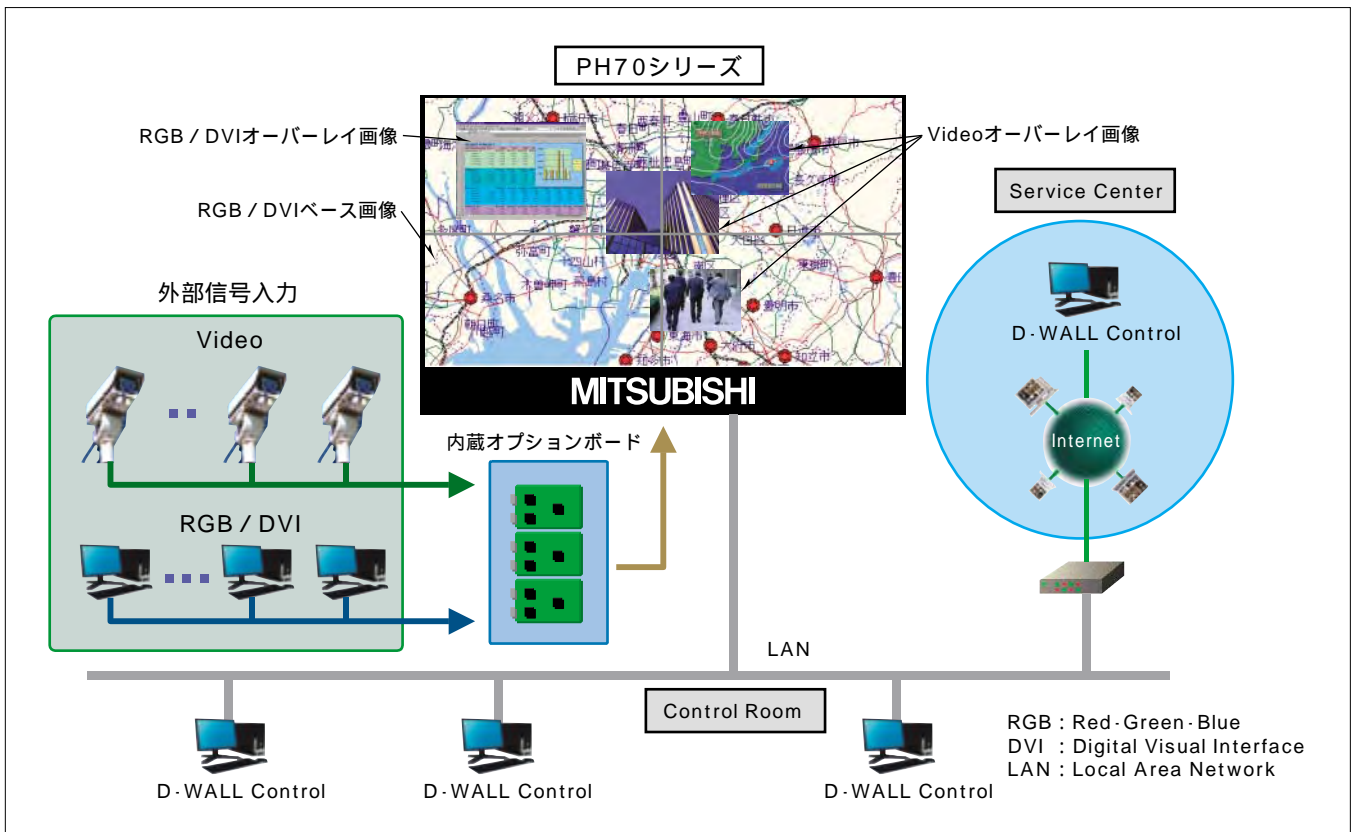
三菱電機のDLP^(注1)(Digital Light Processing)方式大型監視表示装置は、1998年の製品化以来すでに40,000台以上を国内はもちろん全世界に納入してきた。

その多くは、電力・通信・上下水道等いわゆるインフラにおける設備の監視、警察・消防等における事件・事故・火災等の監視指令、道路・河川・ダム等の防災監視、台風や地震等の災害対策、鉄道・航空等の路線運行監視等、人々の安全・安心を守るため24時間365日稼働する重要な設備として活躍している。

こうした設備における製品・システムへの最大の要求は、
(注1) DLPは、米国テキサスインスツルメンツ社の登録商標である。

高信頼性である。24時間の監視の中でその業務が中断されることがあってはならず、また設備として5～10年の長期にわたって動作し続けなければならない。さらには、監視者が多くの情報を容易に取り扱える操作環境と必要な機能の実現、長時間の運用でも人に優しい高い視認性も要求されている。また、設置環境では、省スペース性も重要なファクタであり、保守の容易性も必要になってくる。

本稿では、大型監視表示システムの核である高解像度DLP表示装置の第4世代となる新製品“ PH70シリーズ ”で採用した、最新の技術及び特長について述べる。



“ PH70シリーズ ”を使用した代表的なディスプレイウォールシステムのシステム構成

SXGA+(Super eXtended Graphics Array Plus)(1,400×1,050ドット)の解像度を1ユニットとする表示装置を基本構成として、これらを複数組み合わせることによって高解像度、大画面を実現する。表示装置として、高信頼性と映像全体の一体感、視認性が求められ、システム側として多くの情報をいかに効率よく、容易な操作性で表示を可能にするかが求められる。